

## トピックス

### 亀戸SCで体育の日イベント開催

亀戸スポーツセンターでは例年通り、体育の日にさまざまな特別イベントを開催しますが、今年も、10月9日に「太極拳を楽しむ催し」が開催されました。9時から10時15分までの短い時間で



でしたが、約35名の方が参加しました。初めて太極拳を経験する方々をとくに念頭に置いて、気功と健康太極拳の基本的な部分を楽しんでいただき、また「心息動」の原理について、自然治癒力と絡めてお話をさせてもらいました。

### 新講座「気と気功・経絡とツボ」開講

勉強会の「気と気功・経絡とツボ」講座が10月から始まりました。第2水曜日午前の部（船堀タワーホール）では28名が、第3水曜日夜の部（清新町コミ館）では31名が参加しての開講です。なお従来通り下町会でも同一内容で、こちらは1か月遅れでのスタートとなります。

### 瑞江鶴の会で新師範、新準師範誕生！

さる10月10日、本部道場で行われた師範審査会において、瑞江鶴の会の「鹿野容子」さんが念願の師範に合格されました。また、同会の「鎌田栄子」さんが10月に準師範に昇格しました。

ご両人とも、瑞江鶴の会に永らく在籍されて、勉強を続けておられました。このたびめでたく、師範、準師範に昇格されました。ここにご紹介するとともに、心からお祝い申し上げます。

## 閑人閑話

### みめぐり 三囲神社「三角石鳥居」の謎

先日、久しぶりに隅田公園を歩いて、三囲神社へ参拝したところ、隅に、井戸を囲うように建つ、右の写真のような奇妙な形の三角形の石鳥居があるのを発見しました。そばにある説明文には「三角石鳥居。三井邸より移す。原形は京都市太秦（うずまさ）木島（このしま）神社にある」と書かれています。



三井家というのは、江戸時代の越後屋、現在の三越のことですが、調べてみると大変面白い、謎のある歴史が浮かび上がってきます。三井家の祖先は平安時代には京都にいた藤原一族の一家でしたが、その後近江へ移り「三井」と姓を改め、信長による戦乱を逃れて松坂に定着して、武士を捨てて町人となり、「越後屋」を興しました。徳川幕府開府とともに、江戸へ進出して豪商となり、明治維新の混乱も巧みに乗り切って、ますますの発展を遂げて、「三井財閥」となり、また大デパート「三越」となったわけです。

三井家の越後屋が「三囲神社」を守護神として信仰する理由は、越後屋から見て鬼門にあたる方向にあること、そして囲いの中にある（三）井を守っているからと、三越の広報などには説明されていますが、ともあれ、わざわざ三角石鳥居をこの神社に移して、あたかも三井家の氏社（うじやしろ）さながらに、今日まで崇敬しているわけです。【右；木島神社の三角鳥居】



そもそも鳥居というのは俗と聖を分ける「結界」であることはよく知られていますが、三角鳥居（三柱鳥居ともいう）は、全国的にもきわめて珍しい存在で、かつその意味するところがよくわかっていません。一部にはユダヤ民族との関連を示唆するような解説も見受けられます。

少なくとも言えることは、京都太秦は渡来人「秦氏」の拠点であり、その木島神社は、秦氏の氏社で、別名「蚕ノ社」とも呼ばれているものです。また、太秦には有名な広隆寺があって、これもまた、秦氏の氏寺です。広隆寺の国宝・弥勒菩薩像は聖徳太子が当時の族長の秦河勝に賜ったものとの伝もあります。

秦氏は諸説ありますが、3～4世紀以降、朝鮮半島を経由して日本に渡来した有力部族の一つで、秦の始皇帝の後裔であるとも言われていますが、土木、養蚕、酒造り、農業、機織りなどで、大和朝廷に貢献したことは間違いありません。さらに言えば、京都を代表する伏見稻荷神社（農業神）も、松尾大社（酒造りの神）も、ともに秦氏の氏神であるということにも驚かされます。

三井家と秦氏との関連は正直なところよく分りませんが、この三角鳥居には、秦氏を巡るさまざまな歴史の謎が秘められているようです。

## 左顧右盼 第20話 『チベットの神秘・チベットの悲劇 その2』

### 3～4 元朝とチベット仏教の結びつき

13世紀にはモンゴルが中国を征服して元王朝が出来ます。チベットを初め周辺の諸国、中央アジアまで支配する巨大な帝国が誕生しました。しかし幸運なことに、皇帝はじめモンゴル人はチベット仏教に深く帰依するようになり、チベット仏教サキャ派のラマ（僧正）が国師として首都大都（北京）に招かれます。つまりモンゴル皇帝は僧正の仏弟子になったわけです。（なお、「ラマ教」とはチベット仏教を指す中国側の俗称ですが、のちに日本などでも用いられるようになりました。）

これを期に、サキャ派が再びチベットを統一して、ますます宗教国家として力を蓄えるようになります。その後16世紀には、ツォンカバを始祖とするゲルク派が主流となり、その指導者ソナム＝ギャンツォがモンゴルの指導者から、観音菩薩の化身である「ダライ・ラマ」の称号を授けられて、以降歴代のダライ・ラマ法王が政治・宗教両面を治めるようになりました。ダライは「大きい海」の意味、ラマはラが上、マが人を意味しますので、いわば先生を意味します。密教の場合ほとくに弟子が特定の師について一対一で修行するものですので、この言葉の意味が重要なのです。「グル（導師）」とも言います。

### 3～5 清朝時代

1644年から1911年まで続いた満州族による清王朝時代も、多少のいざごはありましたが、基本的な関係はわかりませんでした。それは、満州族も、また周辺のモンゴル族も、なべてチベット仏教を信仰していたからです。最盛期の乾隆帝もとくにラマ教を深く信仰して、皇帝の避暑地の熱河にポタラ宮を模したラマ教寺院を建設しています。また、北京に招聘したパンチェンラマ6世を自分と同じ高さの椅子に並んで座らせて、朝貢国の使節たちにもパンチェンラマ6世への拝礼を強要したとも伝えられています。また1720年に、ジュンガル部（現在の新疆ウ

イグル自治区)の勢力がチベットへ侵入したときには兵を送って制圧して、ダライラマによる政宗一体の体制を保護していますが、同時に監視のため駐蔵大使を置くようにもなりました。つまり宗主国としての対応が強化されたということです。

### 3～6 イギリスの中国、チベット政策で混乱期に

ところが、イギリスはじめ列強のアジア進出によって、チベットも大きな影響を受けるようになります。まず、隣接するインドについて言えば、イギリスがフランスと覇を争って、東インド会社による収奪を始め、それに対するインド人民の抵抗に乗じて1877年には武力を行使して、直接統治するようになりました。

中国については、イギリスは1840年にアヘン戦争を仕掛けて、香港割譲と上海など主要港の開港と租界の設置を認めさせました。これ以降ほかの国も加わり、中国の植民地化は急速に進みました。

このような情勢の下で、チベットに対しては、北からロシアが、南からはイギリスが、触手を伸ばしてきました。いろいろないきさつはあったのですが、1904年にはイギリス軍がラサに侵入し、当時のダライラマ13世がモンゴルへ避難する事件がありました、また1910年にはイギリスのチベット干渉に反発して清朝政府がラサに軍を進めましたが、ダライラマ13世は今度は(英国支配下の)インドへ避難しました。

ところが1911年に辛亥革命で清朝が滅亡したため、中国側の対チベット政策に空白が生じました。これに力を得てダライラマ13世はインドから帰国して、中国人をすべて退去させたいと、独立宣言をしました。これから1949年まではたしかに、チベットは事実上の独立国として存在していました。

チベットにとって非常に不幸だったことは、積極的に近代化路線を進めていたダライラマ13世が1933年に逝去した後、14世(現在のダライラマ)【右】が化身として発見され、わずか4歳の1940年に即位しましたが、その間、また14世の幼少期にかけて、貴族、地主、僧院等の旧勢力がチベット社会を古い体制に戻してしまったことです。これによって、世界へも、また中国に対しても、独立国としての有効な対外工作や外交交渉が出来なかったのです。もちろん軍備も脆弱なままでした。



1949年中華人民共和国が成立するやいなや、毛沢東はただちにチベットの“解放”を宣言して、翌1950年にはチベット侵攻を開始しました。1935年生れのダライラマ14世【右】が、まだ15歳の時です。1951年にはラサも占拠され、1959年には、ダライラマ14世はついにインドへ亡命しました。そのあとの惨状はご承知のとおりです。話があまりにも政治的に、かつ生々しくなりますので、本稿ではこれ以上記述しません。

### 4. チベット仏教について

仏教伝来以前のチベットには、いわゆる自然崇拝的な原始宗教があって、諸々の神が祀られていました。これを「ボン教」と呼んでいます。また仏教導入後もこの「ボン教」が、教義を整えて、仏教に対抗する形で現存していますので、これも「ボン教」と呼ばれています。

チベット仏教の特徴の一つは、インドから伝来した仏教経典を翻訳するために、ソンツェンガンポ王がインドに人を派遣するなどして、わざわざチベット文字を創出して、翻訳したことです。伝来の時期が中国などよりかなり後であったので、大乘仏教の「顕教」と「密教」がそっくり伝来しました。顕教の経典から、密教の経典に至るまで、サンスクリット語の原典にきわめて忠実に翻訳されたということです。後年、インドにおいては仏教が衰亡してしまい、サンスクリット語の経典もほとんどなくなってしまいましたが、その意味でチベット経典は世界的に大変貴重な



ものなのです。1900年（明治33年）に河口慧海が単身チベットへ潜入したのもまさにそのチベット經典を求めての旅でした。

二つ目の特徴は、政宗一体の国家体制です。輪廻転生を信じる信仰心の強さ、信仰中心の生活というところからの、国家形態なのですが、かなり特異な体制であることはたしかです。ダライラマ（法王）は観音菩薩の化身として君臨しています。逝去しても誰かに転生するとされていますので、次の化身探しがあって、いわば神託によって次のダライラマが発見され、就任するという仕組みです。

この化身探しは地主や高僧などから選ばれた摂政が担当しますし、平時の国家経営についてもすべて法王が行えるものではありませんので、この摂政が担務します。現代的に考えれば、非常に未熟な欠陥の多い体制です。1933年に13世法王が逝去した後の空白期間、そしてその時の摂政たちの、保守的な考え方、世界の動きに無知な行動が、チベットをさらに弱体化させたことは間違いありません。

パンチェンラマというのは、ダライラマに次ぐ高位の法王の名称で、こちらは阿弥陀如来の化身とされています。

ダライラマ制度にしても、パンチェンラマ制度にしても、中国による干渉が厳しくなり、ねじれ現象も出ていますし、事実、亡命中のダライラマ14世は「転生活仏制度」は廃止されるべきだと2014年に発言しています。確かに、チベットという国はなくなり、チベット仏教も弾圧され続けているわけですから、ダライラマもまったくなすすべがないのが現状です。そのあきらめの境地からの発言になったものと思われます。ところが、中国政府はこの発言に猛反発して、「14世が死んだあとは中国政府が15世を決める。」と表明しています。考えてみると、どう考えても、これはたいへん可笑しなことに思えます。【この項次号に続く】

## 旅をうたい拳を詠む

## 鬼怒川温泉紀行

10月初旬に家族で鬼怒川温泉に行ってきました。街には思いがけず若者がいっぱいいましたので、聞いたところ、一つには鬼怒川溪谷での、溪流下りやラフティングなどの川遊びのメニューが充実していること。二つには、日光江戸村、日光猿軍団、ワールドスクエアなどの観光施設が整っていること。第三には、東武鉄道によるSL運航日であったためです。日本中から撮りテツ、鉄ちゃん、鉄女などのいわゆる鉄道マニアが駅頭に新設された転車台に群がっていて、下今市と鬼怒川温泉を往復運航するSLの“転車ショウ”に入っていました。日光江戸村では、文字通り“江戸の町”が再現されていて、数々のアトラクションもあり、なかなか楽しい場所でした。【上；転車台上のC11「大樹」】



高々と汽笛でマニアにんえつつSL大樹は向きを変え行く

武士忍者姫様腰元行き来する江戸村まさに仮想現実

道標にここより二町とあるを見てくるま駕籠を借りたり日光江戸村

山の端に円き残月落ちゆくを湯舟に仰ぐ鬼怒川の宿